



理系女性のキャリアインタビュー [1]

サイエンスとビジネスを 結び付けるコンサルタント という仕事の魅力

アーサー・D・リトル(ジャパン)株式会社 / コンサルタント
横田 友子さん

医学部で看護学を専攻した後、大学院では認知科学を学び、脳に障害を持った患者の脳機能を調べたという横田友子さん。横田さんは「自分の研究してきたことを活かしながら広い世界に出たい」と考え、コンサルティング業界の門を叩く。医療分野の知識や研究者の経験を活かしながら、ヘルスケア・食品業界のメーカーを中心に担当している横田さんに、コンサルティング業界で働くことの面白さ、女性が就職活動する時に気を付けるべきポイントなどについて話を聞いた。



認知科学の研究のために医学部から大学院へ進まれ、看護師・保健師の資格を持ちながら、コンサルティング業界に飛び込まれたというご経歴なんです。思い切った決断だったように感じますが、なぜコンサルティング業界に興味を持たれたのですか？

*
自分が研究してきたヘルスケアの知識を活かしながら、広い世界で勝負したいと考えたからです。コンサルティングの仕事を知るに連れて、サイエンスの領域とビジネスを結び付けられるのではないかとこの可能性を感じるようになりました。

入社後には「大学の専攻に近い領域を担当したい」と希望を出しまして、ヘルスケアや食品業界のプロジェクトを中心に担当させていただきました。医療機器や薬品の知識、研究者という立場からの物事の考え方など、研究生活で得たものを今の仕事で活かしていると思えますね。

サイエンスとビジネスをつなげるという意味では、特に手応えを感じられたプロジェクトがあります。ある大手の化学系メーカーから「新たに着手する研究テーマを考えてほしい」と依頼を受けた時の話です。研究者は自分の好きなことを研究したいけれど、ビジネスとして成立させるためには折り合いを付けないといけない。研究者時代の自分の考え方や、研究内容をビジネスにしていくという視点。両者の考え方が理解できていたことで、建設的な方向に話を導く

ことができました。プロジェクトに貢献できたという実感を初めて得られた案件でした。その時の経験が自信となり、今につながっています。

*
コンサルティング業界にはさまざまな会社があるわけですが、その中でアーサー・D・リトル（以下、ADL）を選ばれた理由を教えてくださいませんか？

直感的に「楽しそう」と感じた会社に入ろうと考えただけなんですけどね。実際に入っても感じるんですが、ADLと一緒に働いている人は、みんな面白いんです。どんな人に対しても、尊敬するところ、面白いところがある。とことん働くときは働いて、遊ぶときは遊ぶ。どちらも全力。人間的な魅力をたくさん持ち合わせた人はかりなんです。規模も大き過ぎず、アットホームな雰囲気です。大学の研究室のような感じで、そんなところも自分に合っていると感じています。

会社としての強みも、そんなアットホームさ、チームプレイで戦えるところにあるのではないのでしょうか。お互いがお互いを信頼し合っているところが誇りです。

それ以外の会社の特徴としては、ADLは製造業の領域でのコンサルティングを強みにしている点が挙げられます。ADLのコンサルタントは6割〜7割が理系出身。技術に強いコンサルタントがそろっているため、ADLは会社の経営上の数字だけを見るのではなく、製品を理解

した上で戦略を考えられるんです。

例えば将来の市場がどうなるのかと考えるにしても、調査会社の見解を頭から信じるのではなく、「この会社がこの技術はこうだから将来的にはこうなるだろう」と自分たちで考えて市場予測を組み立てていけるところが強みだと感じています。社内の状況を知るために、お客さまの社員にヒアリングさせていただく場面でも、製品について十分理解していなければ、相手にしてもらえないかもしれませんね。

コンサルティンクという仕事は、どんなところにやりがいを感じますか？

* クライアントとの打ち合わせは、戦いの場です。すごくプレッシャーを感じます。ただ、成果を出せた時に「大変でしたけどADLにお願いで良かったです」と仰っていただいたことがありまして、今でも印象に残っていますね。

新卒でコンサル業界に入ってくると、「事業って何？ 企業って何？」というところから学び始めないといけません。そんな中でも、経営のトップに対して「貴社はこうあるべき」と提言していかないといけないのです。その分、仕事はハードです。お客さまからはもちろん、上司や同僚からもプレッシャーを受けます。ですから、私は仕事を楽しむことをポリシーにしています。自分の仕事を一生懸命やって達成感や成長を楽しむとか、お客さまに「ありがとう」と仰っていたらいいを目指すが、そういう日々

の仕事の中で楽しみを見つけるようにしています。

また、元々医療系の学問を専攻していたのは、世の中の人の心身の健康に役立つことをしたいと考えていたからです。コンサルティンクの仕事に携わる中で、過去にかかわったプロジェクトの成果が、新しい医療機器という形で社会的にも現れ始めています。現在も、将来的に社会へインパクトを与えられる規模のプロジェクトに参加させていただいておりますので、研究者とコンサルタント、かかわる立場は違いますが、当初の目的を達成できているという実感があります。

就職を考えている理系の女子学生に、先輩としてのアドバイスがあれば話していただけますか？

* 「女性だから」と限った話ではないのですが、自分がどういう人間なのか、人生を通じて、あるいは仕事を通じて自分が何を達成したいのかを十分考えておくことが必要だと思います。コンサルタントらしくないことを言うようですが、その軸さえしっかりしていれば、後は直感で良いように思います。

見極めるためには、自分がどういう人に憧れているかを書き出してみるのも一つの手です。目標とする人物は1人にはならないと思いますので、「こういう人になりたい」というのを集めてみて、継ぎ接ぎしながら理想像を考えてお

くべきでしょう。

また、女性は男性よりも、「どんな仕事ができるか」ではなく「どんな環境でどんな人と仕事ができるか」を重視する割合が大きい気がしますが、会社の環境を見極めるためには、できるだけ会社の人と会うことが大事です。肌感覚が合っているか、女性なら見極めるのは得意なはずですから、きちんとチェックしておきましょう。男性は「家族のため、お金のため」と割り切れる人が多いかもしれませんが、女性は割り切れない人が多いと思いますからね。私の周りでも、一生仕事を続けたいと考えている女性が増えてきます。より仕事が人生に占める割合が大きくなってきたのですから、心から「楽しい」と感じながら頑張れる環境を見つけてほしいと思います。



横田 友子 (よこた・ともこ)

アーサー・D・リトル(ジャパン)株式会社 コンサルタント
大阪大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、京都大学大学院人間・環境学研究科で認知科学の研究に従事する。
ヘルスケア・食品業界のメーカーをはじめ、製薬・ITなどの企業を相手に、経営課題を解決するさまざまなプロジェクトに取り組んでいる。



理系女性のキャリアインタビュー [2]

本当にやりたい仕事があるのなら、職場の男女比は気にせず飛び込んでみよう

ユニリーバ・ジャパン・サービス株式会社 / サプライチェーン
牛童(ニュートン) さん

理系女性の就職に関する悩みの一つに、職場の男女比が偏っていて、女性の数が少なかった時にうまく職場に溶け込めるだろうか、というものがある。

ユニリーバ2年目の牛童(ニュートン)さんは、男性比率の高いサプライチェーンの職場で働く。女性社員の数は少ないが、女性向け商品を多くつくっている外資系メーカーということもあり、多様性(ダイバーシティ)が尊重され、男女差のない会社の在り方に働きがいを感じているという。

そんな牛童さんからの就職活動に関するアドバイスとは――。



大学では情報系の専攻で、画像処理やパターン認識を研究されていたそうですね。現在はユニリーバでサプライチェーンの業務に就かれていますと伺いましたが、なぜサプライチェーンを希望されたのでしょうか？

私が居た研究科では、専門知識を活かして家電メーカーなどの研究職に就く人が多いです。私も理系なのでモノづくりには興味がありました。一つの商品や技術に深くかかわるより、幅広くビジネスにかかわってみたいかったです。それで専攻にこだわらずに就職活動をしているうちに、サプライチェーンという仕事に出会いました。

メーカーのサプライチェーンは、需要・供給計画から原材料の購買、製造、受注・製品配送までの一連のモノの流れに広くかかわります。私の希望に合う仕事だと思いました。それに、理系の能力を活かせそうだとも感じました。サプライチェーンは多くの人やモノに接する分、プロセスやオペレーションが複雑になりがちです。入社後、それをシンプルにして効率化する仕事をしましたが、新しくプログラムを組むときの問題分析能力や論理的思考力が活きましたね。機械に苦手意識が無い分、工場の生産ラインを理解するのも早かったと思います。

入社先としてユニリーバを選んだ理由を教えてください。

就職活動では、三つのポイントを重視しました。一つはグローバルで働ける環境。二つ目は若いうちから成長できる土壌があること。三つ目はモノづくりにかかわれるメーカーであること。以上の三つの条件を満たし、身近な商品をつくられているユニリーバに興味を持ちました。

最終的にユニリーバを選んだのは、選考ですぐと自然体で居られ、自分を出せたからです。印象的だったのは、面接官が一方的に質問するのではなく、私からの質問にも耳を傾け、期待以上の答えを返してくれたこと。人間的魅力を感じましたし、オープンな雰囲気にも好印象を持ちました。

「女性に優しい」会社かどうかは意識しませんでしたね。むしろ、男女を等しく扱ってくれる会社が良いなど。その点でユニリーバは、選考過程で人事から「女性だからといって優遇することはありません。男女平等です」という説明がありました。女性だけに別の仕事を用意するような会社は自分の希望に合わないと思っていましたから、その話からも自分に合う職場だと思いました。

そうして入社されてから、これまで経験された業務を教えてください。

サプライチェーンでは入社から2年間、物流、需要予測、供給計画、品質保証など、サプライチェーンにかかわるさまざまな部署に順番に配属されて研修を受けます。私は2年目ですので、

*

*

*

まだ研修中です。いろんな部署を経験したおかげで、考え方や視野が広がりました。数字一つ見てもその背景で何が起きているのかが分かるようになりましたし、何より、部分的な改善や最適化よりも、会社全体の最適化を意識できるようになりましたね。

中でも、サプライチェーンファイナンスという、工場支援や原価計算などを行う部署での経験が印象深いです。この部署での研修中、原価計算のプロセスが複雑化しているのに気づきました。関連部署に協力してもらえば、もっと効率良く短時間で済ませられるのではないかと。計算の手順や作業内容を簡略化・標準化する改善策を考えて、社長にプレゼンしたところ、高く評価してもらえました。すごくうれしくて、自信につながりました。

条件として挙げれていた「若いうちからの成長」が着実に果たさせているようですね。グローバルな職場という点ではどう感じようか？

*

サプライチェーンの先輩で南アフリカやタイに赴任した人がいます。私もシンガポールと連絡をとったり、ベトナムの人と働いたりして、グローバルな会社だと感じる機会が多いです。グローバルな職場で働く魅力は、広い世界や考え方に触れ合えるということだと思います。考え方や文化的なバックグラウンドが違い、面識もない人とメールでやり取りする時には、「これで伝わるのかな」と不安になったりもします

が、相手の思いや考えを受け止め、自分の意志を工夫して伝えていくのは、働いていて面白さを感じる場面でもあります。

ユニリーバには、私や同期も含めて、さまざまな国から集まった社員が居ます。「女性だから」という性別の違いよりも、まず国籍の違いを意識しましたね。そういう会社だけに、文化や考え方や、個性の違いが尊重され、性別や国籍に関係なく活躍できる職場だと感じています。

先輩の理系女子学生に向けたアドバイスを願います。

*

女性の中には、男性の多い職場で働くことに不安を感じる人も居るかもしれません。サプライチェーンの仕事も男性比率が高いのですが、特に働きにくさを感じたことはありません。女性だということを意識するのは、女性向けの商品に消費者としての意見を言う時くらいでしょうか。男女の区別なくいろんなチャレンジをさせてもらっている中で、仕事にやりがいを感じます。

元々理系の女子学生は、大学で男性が多い環境に慣れているのではないのでしょうか。たとえ男性の多い部署であっても、ほかの部署の女性社員と仲良くなって、一緒にランチに行ったりすることもできます。それほど不安に感じることはないと思いますよ。

本当にやりたい仕事があるのなら、職場の男女比は気にせずに飛び込んでみてはどうでしょうか。チャレンジしてみる価値はあるはずですよ。



牛 童 (ニュートン)

大阪大学大学院基礎工学研究科システム創成専攻を修了。プログラミングの実用性に魅力を感じ、家電への興味も持っていたことから、画像処理・パターン認識を専門にする研究室に進む。学生時代の研究テーマは、人の動きをカメラで撮影して動きのパターン認識をさせるというもの。

理系ナビよりお知らせ

今回インタビューに答えてくださった牛童さんが、理系ナビ主催の下記キャリアスクールにご出席されます。

詳細・応募方法は理系就職ナビ2012 (<http://www.rikeinavi.com/12/>)より順次ご案内してまいりますので、そちらをご確認ください。

- 11/13 (土) 開催 理系女子のためのキャリアデザインセミナー
- 11/27 (土) 開催 サプライチェーンマネジメント職種研究セミナー

より詳しいお話を聞きたい方は、ぜひご応募ください。